

フェスタサマーミュージーザ KAWASAKI 2020

サマーミュージーザは全公演ライブ配信を実施しております。客席内と舞台上に映像収録カメラが入りますので、予めご了承ください。

ミュージーザ川崎シンフォニーホール

神奈川県フィルハーモニー管弦楽団

Kanagawa Philharmonic Orchestra

ベートーヴェン生誕250年 ベートーヴェン・ピアノ協奏曲づくし!

8/6

- **プレトーク**
14:20~14:40
話=崎谷直人 竹平晃子 (フリーアナウンサー)
※本公演と同じお席でお楽しみください。
- **開演**
15:00
- **終演予定**
17:30

- 曲目**
- ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第1番 八長調 作品15[▼]** (40分)
Beethoven: Piano Concerto No. 1 in C major, Op. 15
第1楽章 アレグロ・コン・プリオ
第2楽章 ラルゴ
第3楽章 ロンド:アレグロ・スケルツァンド
—休憩(15分)—
- ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第4番 ト長調 作品58[☆]** (35分)
Beethoven: Piano Concerto No. 4 in G major, Op. 58
第1楽章 アレグロ・モデラート
第2楽章 アンダンテ・コン・モート
第3楽章 ロンド:ヴィヴァーチェ
—休憩(15分)—
- ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 作品73「皇帝」^{*}** (40分)
Beethoven: Piano Concerto No. 5 in E-flat major, Op. 73, "Emperor"
第1楽章 アレグロ
第2楽章 アダージョ・ウン・ポーコ・モッソ
第3楽章 ロンド:アレグロ

※演奏時間は目安です。

出演

指揮: **渡邊一正**
ピアノ: **黒木雪音[♥]、阪田知樹[☆]、清水和音^{*}**
コンサートマスター: **崎谷直人(ソロ・コンサートマスター)**
※出演者・公演内容につきましては変更が生じる場合がございます。

■出演者プロフィール

指揮: 渡邊一正
Kazumasa Watanabe, *Conductor*

1991年東京フィルを指揮してデビュー。1995~2002年広響正指揮者、1996~2015年東京フィル指揮者を歴任。NHK響とも1998年以後共演を重ねる。2015年4月より東京フィルのレジデント・コンダクター。読響、日本フィル、日本センチュリー響、京響、九響、札響、群馬響などに定期的に客演、サンクトペテルブルク響に客演するなど海外でも確実にキャリアを積んでいる。オペラ・バレエでも、新国立劇場、同劇場バレエ団などを指揮。またピアニストとしても、8歳の時に東響、東京フィルとハイドンのピアノ協奏曲を協演。1987~89年にはダルムシュタット音楽アカデミーのマスター・クラスでピアノを学び、その後弾き振りを含むプログラムを行うなど、ピアニストとしても評価されている。

ピアノ: 阪田知樹
Tomoki Sakata, *Piano*

2016年フランチ・リスト国際ピアノコンクール第1位(アジア人男性初)、併せて6つの特別賞受賞。1993年名古屋生まれ。東京藝術大学を経て、ノーファー音楽演劇メディア大学ソリスト課程ピアノ科に在籍。「コモ湖国際ピアノアカデミー」の最年少生徒として認められて以来、イタリアでも研鑽を積む。第43回江副記念財団奨学生。19歳で、第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールに最年少入賞。第35回ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ及び聴衆賞等5つの特別賞、クリーヴランド国際ピアノコンクールにてモーツァルト演奏における特別賞受賞。国内外のオーケストラとの共演、室内楽でも活躍中。2017年横浜文化賞文化・芸術奨励賞受賞。

ピアノ: 黒木雪音
Yukine Kuroki, *Piano*

7歳で内藤彰指揮東京ニューシティ管と、その後も東京フィル、アスタナ市国立響、リトアニア国立響などと共演し、ロシア、リトアニア等の音楽祭にも招かれている。ハノイ国際ピアノコンクール(ベトナム)第1位、国際青少年フェスティバル(カザフスタン)第1位、ショパン国際ピアノコンクール in ASIA プロフェッショナル部門金賞。パリス・ドヴァリヨナス国際青少年コンクール(リトアニア) グランプリ及び全部門総合優勝。いしかわミュージックアカデミー IMA 音楽賞。浜松国際ピアノアカデミーコンクールにてモストプロミッシングアーティスト賞。ピティナ・ピアノコンペティション全国決勝大会特級銀賞、G級金賞、福田靖子賞(第1位)。現在、昭和音楽大学ピアノ演奏家コース4年、同附属ピアノアートアカデミー在籍。江口文子氏に師事。

ピアノ: 清水和音
Kazune Shimizu, *Piano*

完璧なまでの高い技巧と美しい弱音、豊かな音楽性を兼ね備えたピアニスト。ジュネーヴ音楽院で学び、1981年、弱冠20歳でロン＝ティボー国際コンクール・ピアノ部門優勝及びリサイタル賞を受賞。国内外の数々の著名オーケストラ・指揮者と共に演じ、室内楽でも活躍している。ソニーミュージックやオクタヴィア・レコードなどから多数のCDをリリースして絶賛されており、デビュー30周年の2011年にはラフマニノフのピアノ協奏曲第1番~第4番とパガニーニの主題による狂詩曲の全5曲を一度に演奏する快挙を成し遂げた。2014~18年には年2回のリサイタル・シリーズ「清水和音 ピアノ主義」を開催。2016年4月から、年6回の室内楽シリーズ「芸劇ランチコンサート」を開始した。桐朋学園大学・大学院教授。

■オーケストラ・プロフィール

神奈川県フィルハーモニー管弦楽団 Kanagawa Philharmonic Orchestra

【創設】 1970年、神奈川県内の音楽家が集まり発足。2020年に創立50周年を迎える。

【指揮者】 川瀬賢太郎(常任指揮者)、小泉和裕(特別客演指揮者)、現田茂夫(名誉指揮者)、團伊玖磨(桂冠芸術顧問)、山田一雄(桂冠指揮者)

【楽団員数】 70名

【ホーム・コンサート・ホール】 横浜みなとみらいホール、神奈川県民ホール、神奈川県立音楽堂

【楽団ウェブサイト】 <https://www.kanaphil.or.jp/>



●感動をもう一度!アーカイブ配信で
本日の演奏をお楽しみいただけます。 **1公演 1,000円**
配信期間:公演翌日12:00~8/31(月)23:59
<https://tiget.net/tours/summermuza2020/>

●アンコール曲 ●ほほ日刊サマーミュージーザ ONLINE!
●アンケート ●パートナーショップ特典
はこちらの特設サイトより
<https://www.kawasaki-sym-hall.jp/festa/>

ミューザ川崎シンフォニーホール ホールスポンサー		ミューザ川崎シンフォニーホールの公演事業は、ホールスポンサーの皆様によって支えられています。				
法人 【特別賛助会員】 NTTアドバンステクノロジー株式会社 川崎幸病院 川崎信用金庫 川崎フロンターレ キャンノン株式会社 サントリーホールディングス株式会社 大本山川崎大師平間寺 三井不動産グループ 株式会社ヨドバシカメラ	有限会社エムシーエス・デザインズ 神奈川県海鉄道株式会社 川崎アゼリア株式会社 公益社団法人川崎市医師会 川崎市信用保証協会 公益社団法人川崎市病院協会 一般社団法人川崎市薬剤師会 川崎鶴見臨港バス株式会社 川崎日航ホテル かわさきファズ株式会社 川崎臨港倉庫埠頭株式会社 株式会社きんでん 株式会社ケイエスピー ケイジーケイ株式会社 京浜楽器株式会社 株式会社さいか屋 川崎店 公益財団法人JFE21世紀財団 株式会社シグマコミュニケーションズ	セレサ川崎農業協同組合 高橋昌也税理士・FP事務所 株式会社デイ・シイ 東亜石油株式会社 株式会社 東芝 東洋ロザイ株式会社 日本窯炉株式会社 びあ株式会社 富士電機株式会社 ホテルメトロポリタン川崎 株式会社ムーブエイト ヤマハサウンドシステム株式会社	個人 阿部 孝夫 磯野 和久 市橋信一郎 井上 敏昭 遠藤 智和 大木志乃生 大越麻美子 大塚 具幸 小笠原 将 岡野 功 小野 洋彰 金山 直樹 喜多 絢一 久住 映子 小宮みつほ 後藤 実 小林 知子	齊藤 隆徳 佐藤 亨 佐藤 晴茂 鈴木 徹 関口 浩・三代子 高橋 美子 竹内 啓介 都築 豊 中村紀実子 西山 英昭 橋本あみ子 長谷川喜代江 林 直人 平野 信子 廣瀬 治昇 前田 泉 松本 武巳 山内 利夫	山下 啓史 山田 昌克 N. A 他器名6名 他1法人	敬称略五十音順

△新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、ご協力をお願いいたします。

【お客様へのお願い】
※マスク着用、手指消毒にご協力ください。
※終演後は、スタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いている扉から混雑を避けてお帰り下さい。
※出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
※万一、クラスター(感染集団)の発生が明らかになった際、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

【館内設備について】
※クローク、ドリンクコーナー、ショップの営業はございません。
※冷水器の使用は停止しております。
※換気のため、通常よりも空調を強めにしております。また、隣席を空けているため、普段よりも寒く感じる場合がございます。
※アンコール曲は公演後、当ホールホームページに掲載いたします。

ご登録をお願いします

神奈川県 LINE コロナお知らせシステム

会場内に掲示しているQRコードを読み取ってください。新型コロナウイルスに感染された方が発生した際、保健所の調査に必要と判断された場合にLINEメッセージが届きます。
※来場日ごとに、QRコードの読み取りをお願いします。

ホール内は小さな音でもよく響きますので、ご協力をお願いいたします

🚫 演奏中の入退場はご遠慮ください。

🚫 全席指定の公演です。ご自分のお席でお聴きください。

🚫 ホール内客席では携帯電話、スマートフォンなど全ての電子機器の電源をお切りください。タブレット端末など光を発する機器も、周囲の方の鑑賞の妨げとなりますので、ご使用にならないようお願いいたします。

🕒 時計のアラーム・時報などは設定の解除をお願いいたします。

📷 許可のない写真撮影、録音、録画は固くお断りいたします。

🚫 鈴のついたアクセサリー、お荷物などは演奏中に音が出ないように、十分ご注意ください。また、アメの包み紙を開ける音にもご注意ください。

🚫 ホール内での飲食はご遠慮ください。

🎧 【補聴器をお使いの皆さまへ】
補聴器が正しく装着されていることをご確認くださいませよう、お願いいたします。

主催: 川崎市、ミューザ川崎シンフォニーホール (川崎市文化財団グループ)
後援: 川崎市教育委員会、公益社団法人 日本オーケストラ連盟、J-WAVE 81.3FM、OTTAVA
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
映像・音響制作: YouClassics
協力: 株式会社東京MDE、エヌ・ティ・ティ・スマートコネクト株式会社

beyond 2020 音楽のまちかわさき

MUZA KAWASAKI SYMPHONY HALL

作曲家としてピアニストとして本領を發揮、 3曲のピアノ協奏曲でベートーヴェンを知る

●20代の野心を音楽に込めた協奏曲第1番

作曲家であると同時に優れたピアニストとしても、ウィーン音楽ファンを熱狂させたと伝えられているルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）。私たちは彼のピアノ協奏曲やピアノ・ソナタ等を通じて、そのテクニックがどのようなものであったかを推量できるのだ。24歳の時（1795年3月）に一度初演したものの大幅に改訂し、今日聴ける決定稿を自らのピアノ演奏で、29歳の時（1800年4月）に初演した**ピアノ協奏曲第1番**も、そうした作品のひとつだ。

堂々たるオーケストラの響きと、それに続いて多彩な表情の音楽を聴かせる独奏ピアノは、すでに先輩作曲家であるモーツァルトのピアノ協奏曲と比較して格段に大きな規模となっている。交響曲のような壮大さを有した長大な第1楽章、ロマンティックな味わいを前面に出した第2楽章、そして自信にあふれた行進を思わせる第3楽章。第1楽章および第3楽章の終わり近くには、ピアニストが即興演奏で腕前をアピールできるカデンツァ（ピアノのみによる演奏部分であり、楽譜に決められた音符は書かれていない）があり、その他の部分もピアノとオーケストラが絶妙なセンスで音楽的対話を繰り広げながら、ひとつの世界を創造していく。

●小規模ながら慣習を打破した協奏曲第4番

ベートーヴェンは多くの作品において、当時としては革新的な実験を行い、音楽の可能性を大きく広げて後世の作曲家たちへバトンを渡した。ピアニストが一人で弾き始める**ピアノ協奏曲第4番**も、「最初の主題提示はオーケストラ」というそれまでの慣例を打ち破った野心作である。

作曲は、交響曲第4番やピアノ・ソナタ第23番「熱情」、[ラズモフスキー四重奏曲集]と呼ばれる弦楽四重奏曲第7～第9番なども書かれている1805～1806年。ベートーヴェンが36歳の時（1807年3月）、彼自身がピアノを弾いて初演を行っている。ゆったりと流れる河のような雰囲気をもつ第1楽章、シリアスな響きとそれを癒やすような音の掛け合いで進行する第2楽章、力強い音楽で心がぐいぐいと引っ張られるような第3楽章。作品の規模としてはやや小さめであるものの、作曲家として充実期にあったベートーヴェンの自信にあふれており、その自信が第5番「皇帝」へと結びついていく。

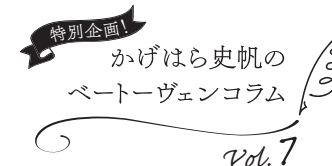
●威厳と繊細さが同居する協奏曲第5番「皇帝」

その威厳ある曲想から、同時代もしくは後世の人間が「皇帝」というニックネームを付けた**ピアノ協奏曲第5番**は1809年に書かれ、1811年11月、ベートーヴェンが40歳のときにドイツのライプツィヒで初演された（ピアノを弾いたのはベートーヴェンではなくフリードリヒ・シュナイダー）。

この作品も実験的な野心作である。たとえば通常であれば第1楽章や第3楽章の終わり近くに配置されているピアニストのためのカデンツァがなく（ベートーヴェンは「他の人間が自分勝手な解釈で弾くことにガマンがなかった」と考えていた、という逸話もある）、ピアニストが演奏テクニックを披露できる部分は第1楽章の冒頭に、いきなりやってくる。ピアノ・パートは完全にベートーヴェンが音符をすべて書いてコントロールしているところも、新しいピアノ協奏曲のスタイルである。また後半の楽章をつなげてしまい、休みを入れないで演奏を続けるという処理も前年に初演した交響曲第5番「運命」や第6番「田園」と同様だ。

開放感が全体を支配している第1楽章（楽章の後半にカデンツァらしき独奏部分があるものの、すべての音は記譜されている）、うっとりするような美しさと繊細な世界に満ちている第2楽章、力強い天空の神々のダンスを思わせる第3楽章。全曲にわたってピアニストが、演奏テクニックや歌心を披露できる名曲である。

■ベートーヴェンと弟子チェルニー



『ピアノ協奏曲第1番』の決定稿が書かれた1800年ごろ。

30歳のベートーヴェンは、ある少年の弟子入り志願を受け入れました。

少年の名はカール・チェルニー、当時10歳になるかならないか。ピアニストとしてサロンを荒らし回っていたベートーヴェンの噂を聞きつけ、すっかり大ファンになってしまった少年は、父親に連れられて彼のもとを訪ねます。若者の指導にはあまり興味のないベートーヴェンでしたが、少年の才能を認めて入門を許可。レガート奏法をはじめとする最新技術を教え込みました。

当時のベートーヴェンはすでに耳の病に悩まされていました。そんな時期に弟子を取ったのは、自らのピアニストとしての将来について思うところがあったからでしょうか。彼の予感は当たります。『ピアノ協奏曲第4番』までは自力で演奏をやり遂げましたが、『第5番「皇帝」』をウィーンで初お披露目する際には、ついに演奏を自分以外のピアニストに譲る決断をします。そのとき白羽の矢が立ったのが、20歳の青年になっていたチェルニーでした。

残念ながらこのときの演奏会の評判はかんばしくなかったと伝えられています。しかしその後も師弟の縁は続き、チェルニーは自宅の音楽会で師のソナタを何度も披露し、またリストのような優れた弟子にベートーヴェンのピアノイズムを伝授しました。ベートーヴェンのピアノ作品の創作と発表は、弟子によってひそかに支えられていたのです。

(かげはら史帆/ライター)